

神戸市室内合奏団 定期演奏会

神戸市演奏協会 第384回公演

先達から受け継ぐもの、新生するもの
～学び合い、与え合う音楽家たちの交流の軌跡～



際立つ独奏楽器、
オーケストラと織り成す対話の妙

～バッハ、モーツァルトの巧み、協奏曲の場合～

2013年10月19日（土）14：00 開演

神戸新聞 松方ホール



プログラム・ノート

中村 孝義
(大阪音楽大学教授・音楽学)

ボッセ前音楽監督のもとで培われた素晴らしい財産は大事にしつつも、岡山潔新音楽監督は、今一度初心に帰って、この合奏団を一からたたき直すと同時に、その演奏力をもう次元高めたいという大きな野望を持っておられるのではないだろうか。今年掲げられた年間テーマ「先達から受け継ぐもの、新生するもの～学び合い、与え合う音楽家たちの交流の軌跡」を見たとき、何か期するものがあると感じたのだ。今回の定期演奏会のプログラムなど、まさにその意図が顕著に現れた典型といってもよい。

私は、バッハとモーツァルトの音楽ほど、それを演奏する演奏家の資質や能力を露わにするものはないと思っている。いずれの音楽にしても無駄な音は一音たりともないし、全く方向性は異なるものの、音楽の核心をとらえ損なっていると、たちまち体をなさなくなるのが両者の音楽なのだ。バッハの音楽は、ジャズやポップスにアレンジされて演奏されることもあるように、どう料理されようが決してバッハであることをやめない芯の強さがあるが、それは演奏家はその芯をとらえている話である。芯をはずせば、いくら頑張ろうと、たちまちバッハとは似て非なるものとなる。

一方モーツァルトも極めてやっかいな音楽だ。これほど無駄なく純粋な装いの元に、人間の複雑な感情の綾が隠されている音楽もないからだ。装いに少しでも綻びがでると、中身もろともあえなく雲散霧消してしまうのに、ほころびなく演奏するだけでは、まるでモーツァルトにならない。モーツァルトをモーツァルトたらしめているその核こそ、まさに音楽の核といい直しても良いものだが、その核心に触れ得たものだけが、まさに彼らの音楽の扉を開くことができるのだ。

岡山新監督が考えているのは、この難しい二つの扉を本当にこの合奏団が開けることができれば、道はずと開けてくるということだろう。今回のプログラムで、この合奏団がどのような進境を見せるか、大きな試金石といってよいかもしれない。

J.S.バッハ オーボエとヴァイオリンのための協奏曲 ハ短調 BWV1060

J.S.Bach Konzert für Oboe, Violine, Straicher und Basso continuo c-moll BWV1060

実はこの作品、現在では消失してしまった作品である。ではなぜ演奏することができるのか。周知のようにバッハは生涯ドイツの地から外に出ることはなかった。にもかかわらず諸国の音楽様式を学びたという一心から行なったのが編曲という行為であった。ただそうした編曲行為は、他の作曲家の作品のものだけにとどまらず、一度作曲した自分の協奏曲を他の楽器のために編曲することも少なくなかった。そうすることによって様々な楽器の可能性と、楽曲そのものに潜む音楽的可能性を常にきわめ尽くそうと考えていたのだ。今日演奏される「ヴァイオリンとオーボエのための協奏曲」は、そうした編曲作品が今に伝えられ（2台のチェンバロのための協奏曲）、原曲が失われてしまった例なのである。そして今日演奏されるのは、こうして現在伝えられている編曲作品から、原曲と考えられる形に復元したものである。第1楽章と第3楽章は、同一の素材からなる総奏部分（トゥッティ）と変化する独奏部分（ソロ）の交替からなる、いわゆるリトルネロ形式でできている。第1楽章ではエコーの効果がなかなか魅力的であるし、また第2楽章では、弦合奏のピッツィカート伴奏に乗って2つの楽器がバッハならではの品格の高い叙情的な旋律を模倣的に歌いかわす。作曲されたのはライブツィヒ時代の1736年頃と考えられている。

W.A.モーツァルト オーボエ協奏曲 ハ長調 KV314(285_d)
W.A.Mozart Konzert für Oboe und Orchester C-Dur KV314(285_d)

モーツァルトは1777年9月に、母を伴い、より良い就職先を見つけるべく、マンハイムからパリへの大旅行に出かけたが、約1ヵ月後に到着したマンハイムから父宛に1778年2月14日付で次のような手紙を認めている。「きのうカンナビヒのところで音楽会がありました。・・・ラムさんがフェルレンデイスのために書いたぼくの《オーボエ協奏曲》の五回目の演奏をしましたが、これはここで大変な評判となっています。今やこれはラムさんの十八番です。」ただここに書かれた《オーボエ協奏曲》がどのような曲なのか、実は20世紀に入るまでその存在さえ知られていなかったのである。ところが1920年にモーツァルトの研究者であるベルンハルト・パウムガルトナーが、モーツァルトの息子の遺品の中から18世紀にウィーンで写譜されたものと推測されるパート譜を発見したのである。ただそれは、驚くべきことに、現在《フルート協奏曲第2番》として知られているものと、調は異なるがほぼ同じものだったのである。モーツァルトはマンハイム滞在中に、マンハイム宮廷楽団の名フルート奏者ヴェンドリングから紹介されたオランダ人医師で、音楽愛好家であったド・ジャンから2曲のフルート四重奏曲と3曲の協奏曲を依頼されているが、それになんとか間に合わせるため、旅行に出る前にザルツブルクで作曲したオーボエ協奏曲を移調するだけで済ましたのではないかというのが、現在流布している通説である。

事の真偽は、現在も必ずしも完璧に明らかにされているわけではないが、両曲ともに、それぞれの楽器のために書かれたとしか思えないような闊達振りと魅力を備えているため、現在では各楽器の最も重要な協奏曲として、奏者たちのレパートリーに収まっている。なお発見されたパート譜は、1949年にパウムガルトナーの手でスコアに再構成されロンドンで出版されている。モーツァルトの多くの作品の中でも、感情表現が実に率直かつ生き生きと展開される第1楽章、バランスの取れた簡素な形式の中で、崇高さに満ちた喜びが自在に奏でられる第2楽章、後にオペラ「後宮からの誘拐」のブロンデのアリアに用いたメロディーを第1主題とする軽快な第3楽章の3つの楽章からなる。ギャラントな協奏曲書法が何とも魅力的で、とにかく見事なオーボエ協奏曲である。

J.S.バッハ 2つのヴァイオリンのための協奏曲 二短調 BWV1043
J.S.Bach Konzert für zwei Violinen, Streicher und Basso continuo d-moll BWV1043

バッハが他国の様々な様式を学ぶため、他の作曲家の作品を筆写したり編曲したりしたことは先ほど述べたが、このようにして学んだものの一つに、イタリアで創案され多くの作品が生み出された協奏曲がある。バッハのオリジナルとして現在残されているヴァイオリン協奏曲はわずか3曲しかないが、これらはどれも彼が盛んにその作品を編曲したヴィヴァルディの協奏曲作法に基づいている。3つの楽章からなり、急速なテンポをとる第1、3楽章はソロとトゥッチェの交替によって形成される、いわゆるリトルネロ形式で書かれ、第2楽章はソロによって美しいカンタービレが奏でられる緩徐楽章というスタイルである。

この「2つのヴァイオリンのための協奏曲」もヴィヴァルディの協奏曲の作法に基づいているが、以前はケーテン時代に作曲されたと考えられてきた。しかし現在の研究では、ライプツィヒ時代の早い時期（遅くとも1730年から1731年頃）に、街のコーヒー・ハウスなどでバッハの指揮のもと活発な演奏活動を展開した、ライプツィヒ大学の学生による演奏団体であるコレギウム・ムジクムのために作曲されたのではないかと考えられている。3つの楽章を通じて、ヴィヴァルディの様式を完全に消化した伸びやかで美しい歌と、バッハならではの堅固な構成感が見事にバランスした魅力的な作品である。

W.A.モーツァルト 2つのヴァイオリンのためのコンチェルトーネ ハ長調

KV190(166_b; KV₆:186E)

W.A.Mozart

Concertone für zwei Violinen und Orchester C-Dur

KV190(166_b; KV₆:186E)

モーツァルトには、自分が出会った音楽を極めて迅速に消化吸収し、自分の語法に同化する力が並はずれてあった。例えば1曲しか残されていない「コンチェルトーネ」という曲種にも、彼のそうした資質が顕著に伺われる。コンチェルトーネとはイタリア語で「大協奏曲」を意味するが、この曲では2つのヴァイオリン、さらにはオーボエやチェロも独奏楽器として扱われる。こうした複数の独奏楽器を持つ協奏曲といえば、協奏交響曲という曲種を思い出される方も多いだろう。しかしこれらはどうも源を同じくする訳ではなく、後者がマンハイムやパリを中心に好まれたものであったのに対し、コンチェルトーネは、1770年代前半にオーストリアや北イタリアで流行したものであった。セレナーデやディヴェルティメントといった娯楽音楽的な要素を持ち、協奏曲より一層自由な形を持っている。モーツァルトはここでもそのスタイルを完璧に消化した素晴らしい成果を収めている。

作られたのは1774年、モーツァルトが旅に明け暮れた時期を終え、比較的長く生地ザルツブルクに身を置き宮廷音楽家としての職務にいそしんだ時期で、彼の音楽がいよいよ実り豊かな青年期に入っていく頃のものである。いかにもモーツァルトならではの明るく自由で、それでいて心に深く沁み込んでくる美しい音楽が3つの楽章にわたって展開される。

| | | | | | |
|-------------|-------------|-------|-------|-------|-------|
| ○ヴァイオリン独奏 | 岡山 潔 | | | | |
| | 服部 芳子 | | | | |
| ○オーボエ独奏 | ディートヘルム・ヨナス | | | | |
| ○コンサートマスター | 白井 圭 | | | | |
| ○第1ヴァイオリン | 幸田 さと子 | 谷口 朋子 | 奥野 敬子 | 黒江 郁子 | |
| ○第2ヴァイオリン | 西尾 恵子 | 井上 隆平 | 中山 裕子 | 前川 友紀 | 萩原 合歓 |
| ○ヴィオラ | 亀井 宏子 | 中島 悦子 | 横井 和美 | | |
| ○チェロ | 伝田 正則 | 田中 次郎 | | | |
| ○コントラバス | 長谷川 順子 | | | | |
| ○オーボエ | 中根 庸介 | 川人 大地 | | | |
| ○ホルン | 大野 雄太 | 槌田 裕美 | | | |
| ○トランペット | 横田 健徳 | 松本 梨沙 | | | |
| ○チェンバロ／オルガン | 熊谷 その子 | | | | |

<プロフィール>



岡山 潔 Kiyoshi Okayama 【ヴァイオリン】

東京藝術大学大学院修了後、ハンブルグ音楽大学留学。1971年から13年間ボン市ベートーヴェンハレ管弦楽団第1コンサートマスターを務める。1984年から読売日本交響楽団第1コンサートマスターとして7年間活躍。エレオノーレ弦楽四重奏団を経て、2008年より岡山潔弦楽四重奏団を主宰し、ベートーヴェンシリーズを中心に活動。1990年より2010年まで東京藝術大学教授、現在、同大学名誉教授、ウィーン音楽演劇大学客員教授。2011年、若手演奏家の育成を目的としたTAMA音楽フォーラムを設立、その代表を務める。2013年より神戸室内合奏団音楽監督。



服部 芳子 Yoshiko Hattori 【ヴァイオリン】

東京藝大附属高校及び同大学を卒業、同大学院を修了。在学中、尾高賞受賞。1968年ハンブルク音楽大学に留学。1970年メンデルスゾーンコンクール優勝(ベルリン)。1971年イザイ・メダル受賞(ブリュッセル)。16年間のヨーロッパ滞在中、各地のオーケストラとの協演やリサイタルの他、ヴァイオリン二重奏、ジャパン・ストリングトリオ、ボン弦楽四重奏団のメンバーなど多岐に亘って活躍。帰国後は愛知県立芸術大学で後進の指導に当たる一方、エレオノーレ弦楽四重奏団を経て岡山潔弦楽四重奏団のメンバーとして活躍。現在、愛知県立芸術大学名誉教授。



ディートヘルム・ヨナス Diethelm Jonas 【オーボエ】

ドイツを代表するオーボエ奏者。バイエルン放送交響楽団、南ドイツ放送交響楽団の首席奏者を歴任し、R.クーベリック、S.チェリビダッケ、L.バースタイン、G.シヨルティ、K.ペーム等の巨匠たちと共演。室内楽の分野ではアウロス木管五重奏団、ザビーネ・マイヤー管楽八重奏団のメンバーとして活躍。また、H.リリング主宰のシュトゥットガルト・パッサハ国際アカデミー、及びパッサハ・コレギウムの主要メンバー。独奏者としてシュトゥットガルト室内管弦楽団やミュンヘン室内管弦楽団等と共演。数々のCD録音もリリースしており、「ドイツレコード賞」を受賞。現在、リューベック音楽大学教授。



神戸市室内合奏団 Kobe City Chamber Orchestra

1981年、神戸市によって設立された神戸市室内合奏団は、実力派の弦楽器奏者たちによって組織され、神戸、大阪、東京などを中心に質の高いアンサンブル活動を30数年に亘って展開している。弦楽合奏を主体としながらも、管楽器群を加えた室内管弦楽団としての活動も活発で、バロックから近現代までの幅広い演奏レパートリーのほか、埋もれた興味深い作品も意欲的に取り上げてきた。また、定期演奏会以外にもクラシック音楽普及のための様々な公演活動を精力的に行っている。

1998年、巨匠ゲルハルト・ボッセを音楽監督に迎えてからの14年間で演奏能力並びに芸術的水準は飛躍的な発展を遂げ、日本を代表する室内合奏団へと成長した。毎年のシーズンプログラムは充実した内容の魅力あふれる選曲で各方面からの注目を集め、説得力ある演奏は高い評価を受けている。

内外の第一線で活躍するソリストたちとの共演も多く、2011年3月の定期演奏会でのボッセ指揮によるJ. S. バッハ「ブランデンブルク協奏曲全6曲」の名演はCDとしてリリースされている。また、2011年9月にはドイツのヴェストファーレンクラシックスからの招聘を受けてドイツ公演を行い、大成功を収めている。2013年度からは、日本のアンサンブル界を牽引する岡山潔が音楽監督に就任し、ボッセ前音楽監督の高い理念を引き継ぎ、合奏団のさらなる音楽的発展を目指して、新たな活動を開始した。